

令和三年度 公益財団法人納税協会連合会会長賞

「病気を通して学んだ税」

奈良市立富雄南中学校 三年 榎本 莉子

税の作文。で真っ先に私の頭に浮かんだのは先天性の病気の事です。

私は、生後半年で腸の一部を切除する手術を受けました。生後三週間で入院してから約半年様々な検査を受け、術後もしばらく入院、退院後も週一回の通院が約一年程続いたとのことでした。十数時間にも及ぶ手術は、見積り書には手術一〇〇万円、術後ケア五〇〇万円トータル一六〇〇万円と書かれてあり両親から顔面蒼白だったと聞きました。

しかし、到底支払うことのできない高額な医療費にもかかわらず、私が根治手術を受けられたのは、税金の使い道の一つである医療費助成制度のおかげだと、小さい頃母に聞いていました。

私の腸は、シワがなくなり、もう少し発見が遅ければ破裂していたかもしれないと言われたそうです。税金のおかげで手術が受けられたと初めて聞いた当時はまだ幼く、ピンときませんでした。が、税の話をする機会も増え、理解できるようになった今、治療に携わってくれた先生や看護師の方々の他に、自分は税金によって助けられたのだとより実感しています。

自分がそうであったように、誰かが納めてくれた税によって救われる人がいるということを心に留め、その誰かに自分もなれるよう感謝と共にこの先しっかり納税していきたいです。

更には、私達中学生の教育にもたくさんの税金が使われており、日本の豊かな教育環境も税金あってこそです。日本の未来を担っていく私達が無償で与えてもらっている教科書を前に、その意味をしっかり受けとめ学んでいかなければなりません。

産まれたばかりの私を救ってくれた税金、今現在中学生としての自分の学びを支えてくれている税金、目に見えるものと見えないものもある税金。どちらにしても支え合いで成り立つ社会であり続ける為にも若い私達がまず税を知り、税を身近に感じる事が何より大切ではないかと思っています。

そして、避けられない時代や社会の変化によって税の在り方と向き合っていくのもまた十代の私達の役割であると感じています。